

追悼

寺岡靖剛先生を偲んで

W³事務局 高瀬聡子（九州工業大学 助教）

W³(WestWomanWind)の名付け親である寺岡靖剛先生（九州大学大学院総合理工学研究院教授）は2014年7月2日に56歳の若さで急逝されました。先生のW³への貢献を表すために、ここに追悼の文章を掲載させて頂きました。

先生は、研究者や学生が活躍する場を得て成長できるようにと配慮くださる方でした。また、女子学生や女性研究者が将来設計を描くにあたって、仕事を継続できるかどうかと不安をもつことを憂慮されておられました。そこで、先生は大変お忙しい中にもかかわらず、W³会議の第1回目から出席され、活動目的や活動内容を決めていくうえで貴重なご意見を多くくださいました。大学や企業など様々な研究フィールドを知っている先生だからこそ発信できる情報や見解は、W³の方針を決定していくうえで重要でありました。また、個人的には、子連れで参加したセミナーで息子とフリスビーで遊んでもらったことが忘れられません。本当に多くの人に広く気配りをされる先生であったことが思い出されます。

研究者や教育者として精力的に活躍され、その研究業績や大学教育への貢献は大きく、これからもご活躍が期待されていただけに残念でなりません。謹んで哀悼の意を表すると共に、ご冥福をお祈りするばかりです。これからは御遺志を引き継いで、研究者や学生が男女の別なく活躍できるようにしていかなければならないと考えております。



第1回W³会議にて

国立大学の法人化の問題が顕在化した頃、女性研究者のあるべき姿についても多方面から議論されようとしていました。当時、欧州では、女性研究者の登用はかなり進んでいました。現在では、欧州のある大学で、理工学系4学科長の内3名が女性、と言った事例もあります。日本での、男女平等参画社会の概念は、人口減少、労働力確保対策の一環として捉えられていた感があります。女性の、“家庭から社会へ”は、家庭（家長制度？）崩壊に繋がりがねないとの危惧はありましたが、女性研究者の男性社会への進出は、時の流れとなりつつあります。女性の発言・行動は、どうかすると男性社会の通念（？）では理解できない場合もあり、“やはり女性ば”との感は払拭しきれませんが。

このような状況の中では、働く女性の実感している課題・問題点を、現場で働く男性女性が共有し、改善・解決方法を現場から発信すること、いままで管理階級（？）にいた男性が、女性の管理能力・指導能力を認めざるを得ない環境の醸成、そのためには、女性研究者自らが、主体的に社会において創造的に行動すること、教育・研究における能力を顕在化すること、研究者志望の若い女性への情報発信など、が不可欠、更には、女性研究者の大学教員登用などの功罪、等を、寺岡先生とは、酒の肴にしながらかし合っていました。

昨今、草食系男性が増えつつありますが、この傾向は、女性が強くなったことと連動しているかもしれません。子供の“いじめ”問題も。“育児放棄”も。新しい男女協働社会を見るには、まだ時間がかかるかもしれませんが、明治以後の女性解放運動は、まだ続いているのでしょうか。女性は女性らしく、男性は男性らしく、美女と野獣、時の流れに流されずあって欲しいものです。

男性であった寺岡先生が名付け親である2013年スタートしたW³のこれからの歩みを、先生とともに見守ることができないのは、全くもって残念ではあります。今後、W³が、男女平等参画社会の推進に貢献することを、先生とともに祈念します。

さて、神代の時代、独り神が天に現れた後、男女一対の神々が5組現れ、最後に現れた一組が、男神のイザナキノ神と女神イザナミノ神だそうです。この二神は、協力し、地上にオノゴロ島を作り、そこで、日本の国（大八島）を生んだそうです。この過程で、女神イザナミノ神が先に声をかけ、生んだ子供は、水蛭子だったそうです。大八島は、男神のイザナキノ神が女神イザナミノ神に声をかけた後、生まれたそうです。我が国最古の書物である古事記上巻に記載されているこの伝承は、何を言おうとしているのでしょうか。ちなみに、旧約聖書では、イブはアダムの肋骨から創造されています。エデンの園を追放されたのは、イブの誘惑が原因、と記されています。